

<<ワークショップ>> (9月22日 10:00-12:30)

【K棟104】

会話データ分析の教育者・研究者による語りから広げる研究と実践の視野
ーグループ・ディスカッションを通してー

中井 陽子, 寅丸 真澄, 大場 美和子

本ワークショップでは、会話データ分析を行う教育者・研究者による「研究と実践の連携」の語りを紹介し、今後の自分の研究や実践で参考にしたい点などについて、グループ・ディスカッションを行い、フロア参加者の視野の広がりを試みる。さらに、学部生・大学院生が同語りをまとめた教材を読み、どのようなことを学び、視野を広げていたか報告し、フロア参加者のさらなる視野の広がりをねらう。また、学部・大学院の授業で学生にこうした語りを読ませる効果についても議論する。最後に、語りから得られた会話データ分析の活用例について、「会話データ分析とその研究成果の活用モデル」に沿って紹介する。これをもとに、再度、グループ・ディスカッションを行い、研究と実践の位置づけを問い直し、さらなる視野の広がりを目指す。

このように、本ワークショップでは、これまでの先達の研究とその成果の活用の功績を知り、学部生・大学院生といった若手の視点にも触れ、自身の研究と照らし合わせる。そして、理論研究や実践研究などを行う様々な分野のフロア参加者がグループ・ディスカッションを通して、互いの共通点・相違点を議論することで、自身の研究と実践の立ち位置を考える場を提供する。こうした参加型のワークショップにより、今後の研究と実践の繋がりについて、世代間、分野間といった縦と横へ視野が広がり、今後の活動の可能性を広げられることを目指す。

<<ワークショップ>> (9月22日 10:00-12:30)

【K棟203】

省略現象から見えてくること
—「磁石」な日本語と「チェーン」な韓国語—

生越 直樹, 尹 盛熙, 金 智賢, 新井 保裕

本企画は、「省略」という現象が日本語と韓国語においてそれぞれどのような形で実現するのかを記述・分析することで、省略傾向の違いが両言語の構造的類似点及び相違点とはどのように結び付くかを考察するものである。さらに、様々な省略データの観察を踏まえ、日韓の違いに焦点を当てることにより、言語構造の個別性と普遍性、言語要素と言語外要素の関連性といったより広い範囲の議論に発展させることを模索したい。

母語話者にとって「何かが省かれている」という直感をもたらす言語表現は、語・句・文・談話と、あらゆるレベルで観察される上に、様々な言語外要素の影響を受ける。省かれる要素は文脈などの他の情報から補えるものであるという普遍的な方向性はあるものの、個別言語の省略形式を詳細に観察すると、具体的に「何が省かれて何が残るのか」は一様ではなく、構造的に多くの共通点を有する日韓両言語の間でも違いが見られる。

本企画では、特に名詞述語構造に焦点を合わせ、名詞止め文、名詞述語と機能語の省略、二項名詞文、SNSにおける省略という観点から、省略現象を通して日韓両言語の持つ特徴を明らかにしようとする。

<<ワークショップ>> (9月22日 10:00-12:30)

【L棟102】

相互行為における指さしの多様性
—会話分析の視点から—

安井 永子, 杉浦 秀行, 高梨 克也, 遠藤 智子, 高田 明

本ワークショップは、人間が日常においてもっとも頻繁に用いるジェスチャーの一つ、指さしに焦点を当てるものである。指さしは、特定の方向や物体を指示し、それに受け手の注意を向けさせる方法の一つであり、人間のコミュニケーションにおける基本的な資源の一つであると考えられている。本ワークショップでは、会話分析の視点から、相互行為において用いられる指さしについて検討する。これまで相互行為における指さしについての研究はなされてきたものの、一部を除き、指さしそのものに焦点を当てた研究は少ない。そのため、指さしの産出が、特定の活動の中でどのように指示行為を達成するか、また、指さしが指示のみを主な行為として産出されないケースにおいて、それが進行中の相互行為において何を達成するかについては、まだ十分に解明されたとは言えない。そこで、本ワークショップは、指さしが話し手と受け手の注意や振る舞いの調整にどう寄与し、その場の相互行為をどう形成するかについて、更に理解を深めることを目的とする。日常会話だけでなく、特殊な活動や子どもを含む会話のビデオデータの分析から、周囲の環境や、参加者が従事している活動、参与の枠組み等によって、指さしの達成における話し手と受け手の注意の調整の仕方がどのように異なり、指さしが相互行為上で達成する行為がどのように異なってくるかを明らかにする。

<<ワークショップ>> (9月22日 10:00-12:30)

【L棟104】

会話分析をどう学ぶか

平本 毅, 高木 智世, 細田 由利, 森田 笑, 林 誠, 増田 将伸, 城 綾実, 西阪 仰

会話分析 (Conversation Analysis) は社会学, 言語学, 言語教育などの分野でますます広く使われるようになってきているが, その技法の学習に焦点を当てると, 独学では習得が難しい一方で, 日本国内の教育機関では十分な学習機会が与えられてこなかった. 学習の基礎的資源となるテキストについても, 欧米で書かれたものを原語で読むのが一般的であった.

だが近年, 初学者向けの教科書が国内で二冊 (『会話分析の基礎』 (高木・細田・森田, 2016), 『会話分析入門』 (串田・平本・林, 2017)) 刊行され, 状況は変わりつつある. 加えて教科書に盛り込まれない応用的な内容をカバーした論集 (『会話分析の広がり』 (平本ほか, 近刊)) の刊行が間近であり, 基礎から応用まで体系的に学ぶための資源が揃いつつあるといえる.

しかしこれらの資源をどう活用していくか, 国内の事情に鑑みた会話分析の学習をどう進めていくかは今後の課題である. 他方で教育者側の人々も, 身近に手本のない中で, 人に教えることに困難さと戸惑いを覚えることがある. 学習者からのニーズと教育者の経験の双方を踏まえ, 整理を行っていく必要があると思われる. 本ワークショップでは会話分析の考え方や諸概念, 実際の分析の仕方をどう学んでいくかを, 上で挙げた三冊の本 (『会話分析の基礎』 『会話分析入門』 『会話分析の広がり』) の著者を集めて議論する.